

「ユーラシア大陸の 2 つの覇権国家」vs「阻止の壁」

上野英詞

「クラウゼヴィッツ」は死なず。されど、戦争は、“easy to start, but really hard to finish.” プーチンの短期決戦戦略は失敗した。

米シンクタンク、Institute for Study of War (ISW) は 3 月 19 日の戦況報告で、①ウクライナ軍は、首都キエフなどの主要都市の制圧による政権転覆を狙ったロシア軍の緒戦の戦役 (campaign) を打ち負かした、②ロシア軍は今後、戦域各所で限定的な前進を続けるも、この方法では戦争目的の達成は極めて難しい、と見ている。

ロシア参謀本部は 3 月 25 日、「作戦の第 1 段階の主要な任務」を完了したと発表した。ISW は同日の戦況報告で、この発表を偽りの報告と決め付け、実際は、ロシア軍はその目的を達成せず、自らの失敗と損失、そしてウクライナの巧みな抵抗の継続のために、大規模な攻撃作戦を放棄することを余儀なくされている、と述べている。

ロシアのウクライナ侵略から 1 カ月が経過したが、依然出口が見えてこない。

さて、地球儀を俯瞰すれば、自由民主主義諸国は今日、「戦争とは他の手段をもってする政治の延長である」ことを信奉し、かつての「最大版図」復活を標榜し、「力による現状変更」を強行しつつある、ユーラシア大陸の 2 つの「覇権国家」に直面している。ユーラシア東部の狭間には、核・ミサイル戦力の強化に邁進する北朝鮮も存在する。

自由民主主義諸国は、2 つの覇権国家の「力による現状変更」を「断固阻止する」なら、ユーラシアの東西で強固な「阻止の壁」を構築し、堅持していかなければならない。

西側には、核保有国を含む NATO という面的広がりを持つ「阻止の壁」が存在する。ロシアのウクライナ侵略はドイツを覚醒させ、また NATO は 3 月 24 日に首脳会談を開催して、その本来の目的である、ウクライナ情勢を踏まえてロシアに如何に対応していくかの検討に着手した。戦争終結に向けて、そして戦後の「阻止の壁」の在り方についての NATO のリーダーシップに注目したい。

では、東側はどうか。ウクライナを「場所の悲哀」と言うなら、海を隔ててはいるが、これら 3 国と隣接する我が国もそうである。あるいはそれ以上とも言える。ロシアは北方領土を不法占拠し、中国は尖閣諸島を狙って、その周辺海域に海警船の船影が消えることがない。

我が国はユーラシア大陸の東端にあつて、日本列島、台湾、フィリピン、南シナ海そしてインドネシアを経てオーストラリアに至る、大陸の前面に南北に連なる「阻止の壁」の要の位置にあり、これら 2 つの覇権国家の海洋侵出の「障壁」をなしている。

東側の「阻止の壁」は、西側のそれと異なり、「第 1 列島線」あるいは 21 世紀版「アチソンライン」とも言える、南北に線状に連なる列島、島嶼群からなる。

そして台湾は、「第 1 列島線における不可欠の結節点に位置し (Taiwan is located at a critical node within the first island chain) ており、インド太平洋地域における安全保障と米国の国益を守る上で不可欠の、米国と同盟国及びパートナー諸国とのネットワークにおけるアンカーの役割を果たしている。」(ラトナー米国防次官補、2021 年 12 月 8 日上院外交委証言)

東の覇権国家、中国がその併合を「最重要の核心的利益」とする対象こそが台湾である。

東アジアを俯瞰すれば一目瞭然だが、もし台湾が中国に併合されれば、我が国経済の大動脈である、南・東シナ海のシーレーンは危殆に瀕することになるろう。

ウクライナの次は台湾かと、警鐘を鳴らす向きも多い。

故に、東側の「阻止の壁」における死活的課題は、「台湾」の安全保障を如何に確保するかであろう。本稿の筆者が夢想するに、①中国が台湾に侵攻すれば、②台湾が独立を宣言し、③日米豪に加えて、英仏独など西側主要国が直

ちに台湾を国家承認し、④集団的自衛権によって軍事支援を発動する——例えば、このような手順を決めた関係諸国と台湾による「安全保障取極め」が、対中抑止力となり、将来的な中台の平和的共存への道を拓くのではなかろうか。

最近、永田町には「覚悟」の言葉があふれているという（3月26日付産経新聞）。「覚悟」を実際の安全保障政策に翻訳することは政治家の責務である。ロシアのウクライナ侵略を奇貨として、台湾問題への真剣な取り組みを期待したい。